

## ○ 各グループからの主な意見

<学力の向上について～読書活動を中心に～>

○子どもたちに、いかに読書に対する興味をもたせることができるかが重要である。そのためには司書の存在が大きい。子どもたちから「どんな本がいい？」と聞かれた時に、興味を広げることができるのが司書である。

○各学校図書館の図書は充足している。学校では朝の読書タイムは行われているが、一番の問題は専任の司書が足りないこと。子どもたちにどんな本がよいか指示してくれる人が不足している。

○司書が子どもたちにアドバイスすると、調べ学習につながり、ひいては学力向上につながっていく。

○行政の図書予算の充実が大事。本の購入だけでなく、司書の設置を考えていかねばならない。

○パートナーシップ事業を活用して、ボランティアによる各学校における図書室業務を手伝ってもらっている。

○今後はロボットの活用や、貸出・返却を子どもがすることで、司書にはルーティーンワークでなく、図書館運営に注力してもらうようにする。

○幼児からお年寄りまでを対象に、ボランティアが読み聞かせを行っている。大人から子どもまでの読書環境を整えている。

○学校では、読書の時間を設けるなど読書習慣を付ける取組については行われている。

○読書習慣を身に付けるのは早い方がよい。1歳児を対象としたブックスタート事業を始めている自治体もある。

○家庭で読書習慣を付けることが大事。幼い時から親と一緒に読書をする習慣を付けるための工夫が必要。

○社会教育活動などを通じて、家庭に本がある環境のすばらしさを伝えて、まず親が本を読み、かつてのように家庭に本が身近にあり、親しむことができる環境を取り戻していく必要がある。

○かつて親と一緒に読んだ本を、次の世代に伝えていくことが、よりよい読書環境づくりにつながる。

○就学前の子どもについては、熱心な読み聞かせのボランティア頼みになっているのが課題である。

○本を読んだ後に感想を書く、あるいは1分間スピーチなどで発表すると、読後感を整理することになり、学力向上につながる。

○ビブリオバトルを通じて、図書への興味を広げたり、新聞を学校に置いて活字へのつながりをつくったりしている。

○例えば、駅前に街角図書館や子ども食堂のように、子どもたちがふらっと立ち寄れる空間があれば、子どもたちの活力を上げることができる。

○学校の図書館と市町村の図書館の間で、本の貸し借りは行われているが、ソフト的な連携が不足している。

- 小学校の図書室を土曜日に開放する自治体や、新しくできた宿泊施設に絵本中心の幼児向けの図書室を設置した自治体がある。
- 図書館を作っても利用者が少ないのではないかという懸念はあるが、読書の推進、学力向上のためには図書の充実が重要である。
- 行政からできるだけ新しい本を各学校に配布している。
- ブックカフェをつくり、そこに本を持ち寄って交流している。
- 地域の偉人に関する、短歌・俳句のコンテストを実施している。
- 乳幼児検診時に本をプレゼントしている。
- 読書はかつては量にこだわっていたが、これからは質にこだわる取組が必要である。
- 小学校においては読書が定着してきたが、中学校では読書時間が減っている。
- 中学校に進学すると、塾や部活動に時間がとられ、読書時間をとることができなくなっている。読書時間を確保するための工夫が必要。
- 中学生は読書の時間が少なくなるが、図書室に子どもたちを集める工夫をしていかねばならない。
- 子どもたちはスマホなどの使用により、読書量が減っているので、スマホなどの使い方、時間の使い方などについて家庭と連携していくことも必要である。
- 社会に出ると、語彙力が必要であると気付く。
- 漢字が読めない等、細かいことにこだわらず、読むことで力につながる。
- 子どもたちが読んだ本の冊数ではなく、読んだページ数を数値化している学校がある。
- 読書時間と学力の相関関係は感覚的には理解できるが、顕著な相関関係はつかめていない。
- 読書活動が学力向上につながるとは言いきれないが、読書活動が介在して、学習方法の工夫をすることが学力向上につながる。
- 「読書は健康につながる」とテレビで紹介されている。読書をすれば、好奇心をもつ、そうすれば身体を動かし、活気ある人生となって、健康寿命が伸びるとのことであった。
- 読書好きの子どもは増えているが、それがすぐに学力向上に結びついていない。さらに細かくデータ分析を行い、ターゲットを絞って、個別の対応をしていく必要がある。
- 先生方は保護者対応など他の業務で忙しく、学力向上に向けての認識を十分にもつ余裕がないと考えられる。働き方改革で仕事を減らし、先生方が学力向上に集中できるようにした上で取り組むことが重要である。
- 先生方が子どもたちに教え込むという方法では、子どもたちの自由な発想が出てこない。子どもたちの「学びたい、考えたい、知りたい」という原点を掘り起こそうとする教師の意識が必要である。
- 英語の読み聞かせを行い、国際化に向けて幼い頃からリスニングの力を付けている。
- 幼・小・中、一貫して学習規律を身に付けさせること、基礎言語を身に付けることに取り組んでいく。
- 家庭学習の定着をどのように各家庭に広めていくかが課題である。

<総括>

- 今日のような熱心な協議が各学校の職員室の場で行われることを期待している。
- 教科書を読めない、読み解く力のない子どもが増えているという声に対して、どう応えていくかが大事。授業でアクティブラーニングをしっかりと展開することにより、読解力を付けていく。内発的動機付けによる読書をする必要性を感じている。
- 来年度、学校教育課が読書活動を担当する。内発的動機付けによる読書活動の在り方を含めて研究していく。
- 数年前にこの会議を開催した時は、会議の発展性に不安をもってしたが、今日はいい予感がする。議論の中味の熱心さが増してきた。これがどう教育現場に降りていくかが重要。
- 教え込みではなく、議論すること、議論がうまく伝播すれば、教育現場の活性化につながる。
- 昔の教え方は刷り込み型であったが、それでは、現在のように本人や社会のニーズが変わってきた時には対処できない。
- 新しい情報や熱意が教育現場に伝われば、教育が変わっていくと思う。
- 首長が教育の内容に議論できるになったのは、教育振興大綱をつくることのできるようになったからである。どのように実行するとは明確化されていないが、今日のようにコミュニケーションをすることにより、内容が伝わっていくのではないかと思う。
- 教育の現場をよくするために、議論をする機会があることが、行政にとってもありがたいことである。